

至高神の八つの顕現

～行いにおける信愛～

親愛なる学生の皆さん！

カリの時代には神の御名を唱えるだけで神を悟るには十分であると言われてはいますが、意欲的な奉仕を行わずに神のナーナスマラナ（唱名）をするだけでは十分ではありません。だれも皆、一つの姿あるいは別の姿をとった神に奉仕を捧げることとナーマスマラナを結合すべきです。ハヌマーンは、奉仕を基盤とした信愛の、最高の模範です。

アシュタイーシュワラ（神聖な富の八つの形態）の顕現である至高の神は、八つの潜在する力によって宇宙に充満しています。活動するものと活動しないものからなる、この広大な宇宙はヴィシュワムと呼ばれます。ヴィシュワムとは、宇宙の隅々にまで充満している神の別の名です。宇宙はヴィシュヌの顕現（ヴィシュワム ヴィシュヌスワルーパーム）です。ヴィシュヌとはすべてに浸透する唯一者を意味しています。ヴィシュヌが原因であり、ヴィシュワム（宇宙）が結果です。宇宙は創造者と被造物の現れです。神創造者と被造物の関係において現されるがゆえに、私たちはその神聖さを認識できるのです。

神の顕現のさまざまな形態

宇宙において、神は最初に水として顕現しました。人間は水なしには生きていけません。水は地表の目に見えるところにあったり、地下に伏流していたりしますが、至るところに存在しているのです。神は、水というかたちで生きとし生けるものすべてを護っています。水はジーヴァナム（生命）という別名でも呼ばれています。神は現象世界において、水というかたちでその存在を顕しているのです。

顕現の2番目のかたちは、アグニ（火）です。火によって、すべてのものは光に照らされて感知されます。その同じ火が、人間の中に消化の火（ジャタラグニ）として存在します。この火によって、人が摂取した食物は血や肉、骨、そのほかのもの（七つの基本構成要素）へと変わって身体を維持します。これらの七つの主要な構成要素なしには、生命は一瞬たりとも存在できません。火のかたちをとった神が、これらすべての要素の基盤です。

顕現の3番目のかたちは、大地です。すべての生き物は大地に栄えます。生死は大地の上で繰り広げられます。誕生・成長・死という現象は、神が地のかたちをとって顕現していることを明らかにするものです。人間は、生きていくのに必要なすべての

ものを大地から手に入れています。それゆえ、大地は神の顕現だと見なされるべきです。神は特定のかたちでは一切体験されることはないゆえに、大地のような現れとして認識されるべきなのです。

4番目のかたちは空気です。私たちは、つねに空気を呼吸し続けています。私たちは、空気の中の酸素によって生かされています。人間は1日24時間に2万1600回の呼吸をしています。吸い込むときに、「ソー」という音が生じます。吐くときには「ハム」という音が生じます。これらの音は、ともに「ソーハム」（我は神なり）という言葉を作ります。「我は神なり」という意味は、人間が生まれながらにして神であることの宣言なのです。神は、呼吸のプロセスの中に認識することができます。そうであるならば、神をあちらこちらに探しに行く必要があるのでしょうか？ 神私たちの中にあり、パンチャ ブータ（五大元素）というかたちで存在しているにもかかわらず、人間は必死にほかの場所で神を探し求めています。

神があなたの内にも外にも、すべてに存在しているのなら、あちらこちらに神を探しまわる必要がありますでしょうか？ この意味において、ある問いが浮かびます。帰依者が神を探し求めるのか、それとも神が帰依者を探し求めるのか？ と。神こそが帰依者を探し求めている、というのが私の答えです。

アーカーシャ（虚空）は、神の五番目の顕現です。アーカーシャの特有のかたちが、サブダ（音）です。宇宙は音の波動で満ちています。音は、現象世界の大部分のものを認知する手だてです。宇宙全体が音の波に満たされています。創造そのものが音から引き起こされました。人が空気を吸い込むとき、「ソー ハム」、「ハム ソー」というかたちでその人から出現するのが、この音です。こうしたアーカーシャは、どこにあるのでしょうか？ 人々は、それがどこか高い所にあると想像します。上にあるのは雲だけです。あなたが音の波動を捕らえるとき、あなたはアーカーシャ（虚空）を体験しているのです。私が話すとき、それがアーカーシャです。あなたがこのテーブルをたたくとき、あなたはアーカーシャを体験しています。アーカーシャは、バジャンで手をたたいているときに存在します。呼吸のプロセスにも存在します。生きることを可能ならしめているのは、アーカーシャです。

6番目は太陽です。すべての生き物は太陽があるゆえに存在することができます。鳥、動物、木、作物、すべてのものは太陽から得るエネルギーによって繁栄します。太陽なしには世界は存在できません。人間の知性は太陽の光輝の反映です。探究する、という理知の本質は太陽から引き出されます。識別する力がなければ、人間は愚かなる存在となるでしょう。

顕現の7番目のかたちは月です。月の本質は、人に穏やかさをもたらします。心（マナス、マインド）は月の反映です。人間の一番の目的は心の平安を得ることです。太陽から地球が生まれ、地球から月が生まれました。太陽と地球と月は同じ要素から構成されています。これらの三つのものが、人においては心、理知、ヴィグニヤーナ（意

識)として現れています。

神は、8番目にヴェーダの拠りどころとして顕現しています。ヴェーダは永遠なる真理を宣言しています。「真理より偉大なダルマはない」という格言があります。真理の具現である神は、永遠であり無形でありながら、宇宙の中に8つのかたちで自らを顕現させています。これらのかたちにおいて神を認識するとき、人は自分の本性を悟ることができるのです。

どこか特定の場所で神を探そうとするのは愚かなことです。人の悲しみや苦難の原因はその人自身にあります。なぜなら、人は自分に内在する神性を忘れて、肉体を真の実体であると見なし、浮世の肉体的な喜びを追い求めているからです。人は自分の諸感覚のすべてを動かしているものは魂であることを忘れてしています。扇風機が回ったり、電球が灯るとき、それを行っているものは電流です。車が走るとき、

エンジンが回転し、ホーンが鳴るのは、バッテリーからの電流のおかげです。それと同じように、人体という車にとって、両目はライトであり、話す言葉はホーンです。そして、すべての感覚器官はアートマ（魂、真我）からの電流のおかげで機能しているのです。

アートマは、心（マインド、マナス）と理知とサムスカーラ（神聖な行い）という三つの構成要素が結びついた姿です。もしだれかが「What is the mind?」（何か気になることでもあるのですか？）と尋ねられたら、「It doesn't matter.」（たいしたことではありません）と答えます。だれかが「What is matter?」（何か問題でもあったのですか？）と尋ねられたら、「Don't mind.」（気にしないでください）と答えます。人々がマインド（mind 心）とは何か、マター（matter 物質）とは何かを知ることに関心がないというのであれば、この世の何に関心があるというのでしょうか？ マインド（心）とマター（物質）を理解することなしに、どうやって何かを探求することができるのでしょうか？

束縛の原因は心

人間の生命の中で、心（マインド、マナス）という、つねに思考に携わっているものが、もっとも重要です。あらゆる悲しみが生じるのは、心の働きを理解することに失敗したためです。心はつねに思考に従事しています。心のこの重要な機能を正しく理解しなければなりません。心は単なる物理的実体ではありません。心は体ではなく、アートマ（魂）の探求する性質の表れです。そのため、心こそが人間の束縛と脱の原因なのです。もし心が神へと向かえば、心は解脱の手段となります。心が浮世の物事へと向かえば、心は束縛の手段となります。神に向けられた心は無執着をもたらします。浮世に向けられた心は執着をもたらします。ですから、心を神へと向けることが人間の第一の目標であるべきです。

心の力は説明不可能です。思考のスピードは、この世の何よりもずば抜けており、

光や風よりも速いのです。こうした巨大な力を授けられているにもかかわらず、人が自分を弱いものと考えているのは残念なことです。心と心臓には何の関係もありません。心臓はむろん、体内にあって生命をつかさどる身体的器官です。心臓は血液を体内各部に供給するものです。一方、心はアートマシャクティ（魂の力）を明示します。

メーダー シャクティとブッディの違い

アートマの第二の構成要素はブッディ（理知 *intellect*）は通常、メーダーシャクティ（知性 *intelligence* の力）でと考えられています。これは正しくありません。実際には、ブッディはアートマの識別の力です。メーダー シャクティ（知性）とブッディ（識別力）にはきわめて重要な違いがあります。知性は物理的実体として人の中に存在しています。知性は神経系統の中心であり、人間にとっての一種の制御室です。一方、ブッディは魂から引き出した並外れた力を代表するものです。ブッディは、肉体とも物理的現象世界とも関係していません。ブッディは、アートマとの関係によって、神聖な性質をもっているのです。

第三の構成要素はサムスカーラです。サムスカーラという言葉は、通常「生き方」と定義されます。しかし、サムスカーラはそれ以上のものです。サムスカーラは、理性と伝統を基にした、正しい行いに相当し、社会の慣行を具体化したものです。

正しい行いをしなければ、人間の生活はまったく無価値です。正しい行いは、人間としての生活の中で何がつかの間のものであり、何が価値を備えているか、という問いを基にしたものでなければなりません。心とブッディは、何が霊的で、何が霊的でないものかを見極めるのに役立たせなければなりません。そうした問いによって永遠の真理の知識が得られたとき、初めて人の行いはサムスカーラ（正しい振る舞い）に反映され得るのであり、これによって生活に神性が付与されるのです。

私たちは今日、政治的、経済的、社会的等々、社会を改善するための多くの試みを目にします。けれども、そのすべては何の役にも立っていません。なぜなら、それらは人間の心を変容させるという必要不可欠な要因を無視しているからです。

多くの人々は、自分の苦境は終わることがなく、神は自分に慈悲を示してくれない、と不平を言います。人々は『ラーマヤナ』のあるエピソードから学ぶとよいでしょう。

ヴィビーシャナは、ハヌマーンと親しくなってからこう尋ねたことがありました。「ハヌマーン！ 君は猿であるにもかかわらず、神の恩寵を受け取っている。私は絶え間なく神を黙想しているというのに、どうして神の恩寵を手に入れることができないのだろうか？」。ハヌマーンは答えました。「ヴィビーシャナ！ 君が絶えずラーマの御名を唱えているのは確かだ。しかし、君はどのくらいラーマの奉仕に従事しているだろう？ ただラーマの御名を黙想していてもラーマの恩寵は得られない。君の兄ラーヴァナがスィーターデーヴィー（ラーマの妃）をさらったとき、君はどんな助け

を施しただらう？ ラーマの不安を取り除くために少しでも何かしただらうか？」。

修行は教えに忠実であるべき

帰依者は、ただ「ラーマ！ ラーマ！」と唱えるだけでは神の恩寵は確保できないということを認識すべきです。皆さんは、ラーマやクリシュナ、あるいはババの命じたことをどれくらい実行していますか？ どのくらい「バガヴァッド ギター」の教えを実践していますか？ 教えを実践していないなら、いくら神の御名を繰り返しても役には立ちません。それではただレコードをかけているのと同じです。神の御名は皆さんのハートに刻まれていなければなりません。

今日、人々は、カリの時代の特権として、人生の目的に到達するには、神の御名だけを唱えていれば十分であると考えています。しかし、これは誤りです。マイナスの電線だけ持っていて電流は得られるでしょうか？ プラスとマイナスの電線が結合したときにのみ、電流は流れます。信愛は、神への献身的な奉仕によって表現されなければなりません。

神の御名を唱え神聖な行為をせよ

愛の化身である皆さん！

皆さんが愛をこめて神の御名を唱えるなら、皆さんの手足で神の命じることを実行するなら、そして、世界を神の顕れであるとするなら、皆さんは神の恩寵を受け取るはずですが、このことを固く信じていなさい。ただ神の御名を唱えることのみが必要かつ十分である、という誤解に苦しんではなりません。御名を唱えることに加え、神聖な活動に参加しなければなりません。どんな障害に出くわそうとも、気にしてはなりません。これぞ、ハヌマーンが、スィーターを探しに出かけたときに遭遇した障害のすべてに打ち勝った際に伝えた教訓です。ハヌマーンは、神への献身的で確固たる奉仕の最高の模範として際立っています。

毎日、少なくとも5分は神の御名を唱え、少なくとも数分は貧しい人や見捨てられた人への何らかの仕に充てなさい。日々の祈りの中に、世界のすべての人の幸福のための祈りを加えなさい。自分自身の幸福や救済に夢中になってはなりません。悪い思いを抱いたり、他の人を傷つけることのない生活を送るよう努めなさい。このことを霊的規律の一種と見なし、人生をまっとうしなさい。

サイババ述

1990年2月8日

マドラスにて

Sathya Sai Speaks Vol.23 C2

『プラサード 第二版 食物に関する御言葉集』より